【お題短編】天の岩戸の上手な開け方【執事・主従・太陽】

ひたぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【お題短編】天の岩戸の上手な開け方【執事・主従・太陽】

【Ｎコード】
Ｎ９３２８Ｉ

【作者名】
ひたぎ

【あらすじ】
「執事」と「お嬢様」のお茶会の一コマです。

（前書き）

数年前に某所に投稿したお題執筆形式の短編です。

とある所に建てられた、豪邸と呼んでも何ら差し支え無いお屋敷。私はそこで執事をやっている。

執事という者は元来、一人の主の為に全身全霊を持って世話をする者だ。そこには一切の手抜きも妥協も許されない。

私も執事養成所で長い間経験を重ね、この屋敷に配属されたプロの執事なのだ。

今私は、その仕えるべき主に呼ばれて中庭に向かっていた。連絡通路を通り、中庭へと続く扉を開ける。

途端、眩しい光が私の目を覆った。一瞬顔をしかめ、空を見上げる。

天気は快晴。雲一つない青空が中庭いっぱいに澄み渡り、心地よい風が私の髪を縫っていった。

いや、私だけではない。中庭に設置された純白のテーブルセットに腰掛ける女性が、同じように髪を抑えていた。

栗色の髪をしっとりとした笑みで梳く女性が、私の存在に気付き顔をこちらへ向けた。私は姿勢を正して一礼する。

「お呼びでしょうか？　命（みこと）お嬢様」

「……来たわね」

天照　命。それが、私が仕える主の名前であった。

お嬢様は、天気の良い日は中庭でティータイムを取る事を楽しみとしていた。

執事である以上ティーポットや茶菓子などのセッティングは本来自分がやるべきはずなのだが、お嬢様は私が身の回りの世話をする

事をあまり快くは思っていなかった。
曰く、「自分で出来る事は自分でするからいい」と。
こうなると執事の面目丸つぶれなのだが、お嬢様がそう言っている以上無闇に気を使う訳にもいかない。私の仕事はもっぱらお屋敷の掃除だった。
しかし、それでもお嬢様が私を必要としてくれる時もある。そういう時はは決まって、今日のような快晴の日だった。

天照　命お嬢様は、美人である。
と、私は思う。
このお屋敷のヌシにして私の主である。この人に仕える事が出来るなんて、なんて幸せ者なんだ。
と、私は思う。
容姿端麗、頭脳明晰。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は何とやら。非の打ち所の無い完さ璧が服を着て歩いてるような、そんな人だった。
だったら良かったのになと、私はつくづく思う。

「今日ここにおまえを呼んだのは他でもない」
「はい」
お嬢様はにっこりと微笑み、そう言った。見た目には決して出さないが、私は自然と体が強張る。汗は気合で止めた。
こういう風に呼び出される事は何度も合った。お嬢様は普段通りに私を呼び、普段通りに笑い掛け、普段通りのフレーズで会話を開始する。
だが慣れたものではなかった。私は緊の一文字で自分を縛り、次に来るであろうお嬢様の発言。いや宣告を聞き入れる覚悟をした。
お嬢様は純白のカップに一口口をつけ、とっておき悪戯を思いついた子供の様に無邪気に。いや邪気に満ちた笑みで言った。

「おまえ、今、私の目の前で何か粗相をしてみせろ」

天照　命お嬢様。容姿端麗、頭脳明晰。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は何とやら。

そして太陽の気の向くままに私をいじめる、素敵に愉快な私の主。

ほら来た。私はお嬢様の宣告を耳に通した瞬間にそう思った。

お嬢様が私を直々に呼ぶ時は、決まって私に無理難題を言い渡す時だ。

先週は私が苦手なのを知っている上で、カエルを素手で取って来いと言った。しばらく鳥肌が治まらなかった。

一昨日は急に果物が食べたいと言い出し、各地の名産品を当日に集めさせられた。その癖あまり食べなかった。

とにかく無茶な要求ばかりしてくるのである。そして今日のお題がコレだ。

「……粗相、ですか」

「そ。貴方何やらせても完璧にこなすから……。おまえが何かミスをする所が見たくなった」

私はしばし考える。今日はいつになく難題だ。執事がわざと失態を犯すなどあってはならない事だ。

だが。だが、それが主の頼みとあらばいかなる理由があっても遂行させなければならないのも執事の務めである。

どうすれば……この場合、どうすればいいのだろうか。

考えながらちらりとお嬢様を見る。ニコニコと実に楽しそうに茶菓子をつついていた。その笑顔は無理難題に嘆いている今の私ですら何か心地よい気持ちにさせてくれる。

……そうだ。やはり執事として、ここはお嬢様に喜んでもらわねば。

私は決心する。お嬢様が喜び、かつ執事として大変な失態を犯し

てやろうと。
　方法は、ある。多少……いやかなり恥ずかしいがやるしかない。時間を掛けるとお嬢様の機嫌がどんどん悪くなる。快晴だった青空に雲が出始めてきた。
「わかりました。では、粗相の方をさせていただきます」
「うむ、やってみろ……ん？」
　多少おかしい日本語を使いながら、私は三歩、お嬢様に近づいた。当の本人は意味がわからずキョトンとするばかりだ。
　三歩。即ちお嬢様の直ぐ目の前に立っている私は意を決してその場にひざまずく。そしてお嬢様の手を取り、顔を上げ、視線を合わせた。
　ほのかに赤くなっているお嬢様の顔を見上げつつ、私は視線を外さないままはっきりと告げる。

「お嬢様！」
「な、なんだ？」
「……愛しています」

　きっぱりと言い切った数秒後、夕立特有の雨の匂いが鼻をつくと共に左頬に衝撃が走り、私の意識は闇へと落ちた。

　天照　命。それが私の名前である。
　神話に出てくる天照大神の力を代々受け継ぐ私は、現代のアマテラスと呼ばれ子この屋敷に住んでいる。
　あの馬鹿執事と共に。
　今日は天気が良かった。気分も良かった。なのでお茶会を開いた。だからあいつをイジめてやった。
　いつも通りだ。いつも通りの流れだ。なのに何故こんな事になってしまったのだろうか。
　私は自室の窓からさっきまで晴れていた中庭を覗く。外は激しい

豪雨に見舞われていた。溜め息を付き、私はカーテンを閉める。
ふと入り口近くに置いてある水槽を見る。中には巨大水槽にはいささかサイズの合っていないアマガエルが一匹入っており、雨の音に反応して動き回っている。
溜め息二つ。私はベッドに寝転がり目を閉じる。
「確かに粗相をしろと言った。言ったが……もう少し、何ていうか、こう……」
独り言すら上手く言葉にならず、私は枕に顔をうずめた。雨脚は強くなる一方だ。
考えても考えてもわからない。いやわかる。わかり過ぎる程にわかる。どう考えても、私が悪い。
頭ではわかっているが心がそれを認めない。ゆえにわからなくなる。
「これから、あいつに何て言おう……」
気まず過ぎる別れをしてしまった事を今更になって後悔した。

その時、自室の扉が二回、丁寧にノックされた。

私は心臓が飛び出る程に驚いたが、しっかりと施錠されている事を確認し、確認しなくても良いような事を改めて確認した。
「……誰だ」
「あの、私です。お嬢様、ちょっとよろしいでしょうか？」

「その、先程は申し訳ありませんでした」
扉越しにあいつの声が聞こえてくる。だが私はベッドから一歩も動けず、扉を挟んで会話をする他に無かった。
まるで天の岩戸だなと、私は思う。
「……いい。気にするな。私も、その、大人気無かった」
「そんな事おっしゃらないでください。私の不注意であの様な事を

……深く考えず行動したばっかりに」
「だから私も悪かったと言っているだろう」
言ってから、私はだんだん自分の機嫌が悪くなっていくのがわかった。理由も明白だ。
何でそう謝ってばかりなのだあいつは。いつもいつも……今日なんて全面的に私が悪いじゃないか。謝られる筋合いなど……。
考えていく内に先程の天の岩戸というフレーズが脳内で繰り返される。
頭ではわかってはいる。わかっているのだが……口が勝手に動いてしまった。
「その、扉を開けてはくれませんか？」
「……いやだ。開けて欲しければ、何か貢物を持って来い。とびきりのな」
天照に天の岩戸。神話の再来かと言う状況を自分のせいで再現してしまったのだ。後悔してももう遅い。
開けてやらん。絶対開けてやらん。あいつが考えを改めるまで開けてやるもんか。何を持ってきても無駄だ。
扉の外の声が途切れる。と、思ったその瞬間、一層申し訳なさそうな声がぼそぼそと聞こえてきた。
「……あの、実は」
「なんだ」
「せめてものお詫びにと、余っていた果物でタルトを作ってきたのですが……その、お茶会も途中になってしまいましたし……」
私はティーセットとタルトの乗ったキャリアーと一緒にお嬢様の自室の前にいる。しかし扉は開かれそうになかった。
やはり駄目だったか。ここは少し時間を置こう。もう一度許してもらう方法を考え直さねば。
私はキャリアーに手を掛け扉から立ち去ろうとする。踵を返し重

い足取りで廊下を歩き出そうとした、その時だった。
かちゃりと小さい音が聞こえたので慌てて振り返ると、小さく開いた扉の隙間からお嬢様が顔だけ覗かせてこっちを見ていた。
「あ……お嬢様」
無言でじっと見てくるお嬢様と視線を合わせると、私も何を言って良いのかわからなくなってしまった。
しかし沈黙はお嬢様の方から破られた。
「……反省」
「え？」
「反省、しているか？」
「あ……はい、もちろんです、お嬢様！」
「私も、している」
顔を伏せ小さい声で一度だけそう言うと、お嬢様はすばやく扉から体を出して私に向かって駆け出してきた。
いや、私にではない。ティーセットの乗っているキャリアーの取っ手をすばやく奪い、廊下を歩いていってしまった。
「あ、あのお嬢様？」
呼び止めると、先程の不機嫌な声が嘘の様に、満面の笑みで振り向いてくれた。
「おまえも来い！　中庭でお茶会の続きだ！」
「中庭って、外は雨……あれ？」
私は廊下の窓から外を見た。
外は雲一つ無い青空が広がり、雨上がりの虹が大きく弧を描いていた。
―終わり―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9328i/

【お題短編】天の岩戸の上手な開け方【執事・主従・太陽】

2010年10月8日15時12分発行